

## 池田満寿夫と私

—知られざる創造の舞台裏

北川健次 (美術家・作家)



池田満寿夫 スフィンクス・五月  
ドライポイント、ルーレット、メゾチント、エッチング 304×268mm 1970年



池田満寿夫 少し長い指を持ったスフィンクス  
エッチング、ルーレット、メゾチント、ドライポイント、アクアチント  
302×268mm 1970年

「北川さん、広重たちが作り上げてきた版画の文化は、このままいけば早晩に消えて亡くなりますよ。」——長い間、日本で版画商をしている米国人のT氏が真顔で私に語った。「あなたもそう思われますか。」——私もまたT氏にそう応えた。周知のとおり江戸末期の広重や北斎が西欧の近代絵画に与えた影響は計り知れないものがある。この国の版画という文化はかつては世界に向って冠たるものがあつたのである。しかし、最近の美術の分野の中で、わけても版画というジャンルは精彩が無い。60年代から70年代の半ば辺りまであれほど光が当たっていた版画というジャンルが幻影であつたかと映る程に、今やそれは死に体と化しているのである。その意味で考えてみると、70年代の初めに銅版画と出会った私は、その光の残照に浴することが出来た最後の世代なのかと思う。そしてそれ故に語れる事が幾つかあるのではないかとも思っている。それについて少し記そう。

一本の電話が、人生の運命の扉を突然開く事がある。私の場合がまさしくそれであつた。夜半にかかってくる一本の電話。声の主は、当時『プリントアート』という版画の季刊誌を刊行していた版画商の魚津章夫氏であつた。「北川さん、池田満寿夫さんに会ってみる気はありますか!？」——「池田満寿夫」……、この名前ほど、当時未だ美大生であつた私の耳に鮮烈に響く名前ではなかつた。その時、私は既に銅版画を始めており、駒井哲郎・棟方志功・そして神奈川県近代美術館の館長であつた土方定一といった人達からは作品が評価されていた。特に、土方氏からは、氏の英断で美術館がバックアップとなり、当時の現代版画の中心的存在であつた南天子画廊での個展を開催するという話が進行していた時期であつた。しかし、最も影響を受けていた池田満寿夫氏はニューヨークの彼方であつた。その池田氏が今帰国中であり、魚津氏はこの私に、〈美大の学生と作家〉という形の座談会で引き合わせようと考えてくれたのであつた。勿論私は快諾し、新宿の中村屋で開かれた座談会に臨んだ。私にとって幸運だつたのは、帰途の電車が池田氏と二人きりだつた事である。「私の版画を見て頂きたいのですが……」私がそう切り出すと池田氏は私をじっと見ながら「近々に、間違いなく」——そう笑顔で語って私達は別れたのであつた。

暫くして池田氏から連絡が入り、池上にある現代版画工房という所で制作しているので、そこに来ないかという誘いがあつた。持参した十点近い版画をカルトンから出して広げると強く興味を抱いたらしく、かつて棟方志功氏がそうしたように、体を屈めて床に広げた版画に見入つた。棟方氏はその間唸るように独り言をしゃべり続けたが、池田氏は凝視したまま無言であつた。そして見終えるや、私の方を見て、「君は既に完成している。今すぐ個展を開くべきだ。画廊は僕が紹介する。個展の序文も僕が書こう!!」と語ってくれたのであつた。——この瞬間、私は自分の運命を池田氏に預けようと決断した。しかし既に土方氏の考えで個展の話が進行しているという話をすると、池田氏は即断したように「いや、番町画廊の方がスタートとしては一番良い」という話になつた。土方氏には申しわけないと思つたが、これも運命であろう。コミッショナーであつた美術評論家の中原佑介氏の推薦を受けて第10回東京国際版画ビエンナーレの日本の代表作家の一人に選ばれたのはその直後であつた。それをアメリカの池田氏に報せると、我が事のように喜んでくれた手紙を受け取つたが、その末尾には「私はアメリカ





池田満寿夫 アウグストに寄せて  
メゾチント 229×201mm 詩画集『トラベラーズ・ジョイ』より 1973年



池田満寿夫 花をつけた灯心草  
メゾチント 229×201mm 詩画集『トラベラーズ・ジョイ』より 1973年

の代表作家として出品します。お互い頑張りましょう」と記されていた。私は池田氏の懐の深さと、自信の凄みを痛感した。

個展は池田氏の序文が強力な後押しとなり、作品が全て完売した。結果を全く予想していなかった私と画廊主の青木宏氏は慌てた。何百枚という刷りを短期間で完了し、コレクターに渡さなければならないのである。しかし私は一点ずつに質の高い刷りをするべきだと考え、その旨を池田氏を通じて青木氏に話し、コレクターたちの了解を得た。そして短期間で更なる刷りの技術の向上を計り、池田氏の刷り師であった林健夫氏の工房へと赴いた。——ここで私は、池田氏に対して抱いていたイメージが一変する事となるのである。「池田さんが先程まで来られていて、本当に入れ違いでしたね」と語る林氏の言葉に引かれるようにして、私は広い工房の中へと入った。その薄暗い工房の中に見たものは、まさしく池田満寿夫氏の知られざる創造の秘密(舞台裏)とも云うべき光景であった。

……テーブルの横に林立するように並べられた夥しい数のベニア板の連なり。その一枚ごとに、同じ版画の色違いの試刷りが何点も何点も貼られているのである。池田氏の極立った才能の一つは抜群な色彩感覚であろう。即興の人、直感の人という表のイメージに反して私がそこに見たのは、何度も執拗に試刷りを積み重ね、ようやく私達が知る池田版画の名作が立ち上るといふ、まさにその舞台裏の光景であった。衝撃を受けた私は、完成へと至るその過程の変容の様に見入った。最初の試刷りの色はイメージに沿った凡庸な色である。それが少しずつ変容して、或る辺りから色彩がにわかにマジック性を帯び始め、決定した時には、そこに深いポエジーとエスプリが入りこんだ池田美学の結晶が立ち上っている。——私はその様を見た瞬間、名作が生まれるのに必須な条件としての試刷りの重要さ、納得がいくまでのこだわりの重要さを痛感したのであった。ルドンや長谷川潔の刷りに対するこだわりは逸話として知られているが、池田氏のそれは今まで語られる事の無かったものである。しかし私が垣間見たそれは、人々が思い描く軽妙なイメージからはほど遠い、自身の内に潜んでいるデモニッシュなる物をつかみ出し形象化するための、あたかも修羅のごとき現場であったといえよう。

2012. 11. 24

## 北川健次

1952年福井県生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科修了。駒井哲郎に銅版画を学び、棟方志功・池田満寿夫の推挽を得て作家活動を開始。'75年現代日本美術展プリチストン美術館賞受賞。'76年、東京国際版画ビエンナーレ展(東京国立近代美術館)、『81年、リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展招待出品。井上一(書)・四谷シモン(人形)・坂茂(建築)等と共に「未来のアダム展」に招待出品(企画/高橋睦郎)。90年、文化庁派遣芸術家在外研修員として渡欧。'93年、来日したクリストよりオブジェ作品の賞讃を得るなど、銅版画とオブジェの分野における第一人者の存在。版画、油彩画、オブジェの他に写真、詩、評論も手がける。鋭い詩的感性と卓越した意匠性を駆使した作品は、美術の分野において独自の位置を占め、高い評価を得ている。

2008年にランボーを主題とした作品が、ピカソ、クレー、ミロ、ジャコメッティ、ジム・ダイン、メーブルソーブラと共に選出され、アルチュール・ランボーミュージアムで展覧会が開催される。同年、CLAUDE JEANCOLAS著による『LE REGARD BLEU D'ARTHUR RIMBAUD』(FVW EDITION社)に、上記の作家たちと共に掲載される。2010年にパリ市立歴史図書館にて開催された「RIMBAUD MANTA」展に招待出品。2011年、約200点の作品からなる大規模な展覧会「北川健次——鏡面のロマネスク」展を福井県立美術館で開催。

著書に『「モナ・リザ」ミステリー 名画の謎を追う』(新潮社)、『死のある風景』(久世光彦との共著/新潮社)などがある。

■オフィシャルサイト <http://kenjikitagawa.jp>